

中国60年代と世界

第5号

2015-11-26

発行人 〈中国60年代と世界〉研究会

編集人 文革50周年再検討会編集グループ

第4回研究会報告 森瑞枝、佐藤賢……(1) / (第5回研究会要旨) 私にとっての文革 朝浩之……(2)
／ 胡傑監督『星火』字幕(その1) 土屋昌明……(4) / (蔵出し批評) 毛沢東思想と日本の学生運動(抄)
解題・前田年昭……(10)

第4回研究会報告

研究の「エアポケット」としての香港への文革の影響

9月24日、第4回研究会がもたれた。佐藤賢から「香港の60年代——映画『ワイルド・ブリッド』に見る文革の影」との報告がなされた。

冒頭、自己紹介を交え、60年代を映像風景を手がかりに考察したいとの問題意識が述べられた。当時、英植民地統治下にあった香港では67-68年の香港暴動があり、この香港暴動が映画にどう表れているか、映画『ワイルド・ブリッド』の抜粋上映と紹介がされた。報告者は、香港暴動をとおして文革は、香港の戦後世代の若者たちに「本土意識」を芽生えさせる契機を与えたと評し、香港はどこへ向かうのかという問いは今日的な思想課題だと指摘した。

参加者からの応答、討議がされた。ある参加者から日本軍の香港占領、および45-50年の土地改革という歴史的背景が提起された。幹事から日本人の中国研究のなかでの香港の欠落が指摘された。香港には世界的にも資料が残っているとの指摘があり、別の参加者は毛沢東派における金思愷の『思想の積木』(矢吹晋訳、龍溪書舎刊)の意義を強調した。

香港は文革研究にとっても「エアポケット」(ある参加者の言葉)だと再認識した報告と討議であった。

(敬称略、文責・前田)

オキュパイ!香港

森瑞枝

佐藤氏の「ワイルド・ブリッド」分析で、私ははじめて香港を香港として認識したような気がする。香港に視座をずえると、たとえばサイゴンは冷戦イデオロギーをはみ出すアジュールとなる。矢吹氏が指摘した英国が

香港をさっさと日本軍に明け渡していた事実は、大英帝国にとって香港は経営すべき植民地ではなく、対中国外交カードにすぎなかったということなのだろう。大英帝国の庇護は幻想だったのだ。居留民は愕然としたことだろう。しかし大陸からの流民大陸流入華人はむしろ増殖して、今日の超高密度華人都市となった。彼らは要するに台湾国民でも大陸中国民でもない中国人である。

英国領香港に居住する彼らは、とりえず国民党でも共産党でもない場所、二大勢力の埒外に居場所を求めて難民、根無し草を選択したのである。英国統治下の香港暴動では、その根無し草が本土意識に目覚めたという。だが、中華人民共和国の特別行政区を割りつけられた今、国家の庇護を輓と察知した人々が、雨傘をかざして路上を占拠している。雨傘は根無し草のねぐら、いわば1人テントではないか。本土はいらない、もとより砂上の楼閣だ。自分の居場所を占拠せよ、世界は香港だ。オキュパイ!香港。

発表をおえて

佐藤 賢

第4回研究会において、「香港の60年代——映画『ワイルド・ブリッド』に見る文革の影」と題した発表をおこなう機会をえた。発表では、ジョン・ウー監督のアクション大作『ワイルド・ブリッド』を、故郷回帰の物語として捉えることから、香港の戦後世代の若者たちが、香港暴動を契機に、それまでの香港がもつ「難民社会」的な性格に由来する根なし草的な状況を打破し、自らが生きる〈いま・ここ〉を問う「本土意識」を獲得していくプロセスについて

て話をした。映画を全編観る時間的余裕がなかったので、分かりにくい発表となってしまったと思うが、それでも、「難民社会」を生み出した香港における人口流動を考えるには、日中戦争期の日本軍による香港占領期から見ていくべきなど貴重なコメントをいただくことができた。

ところで、本発表の出発点は、いわゆる「娯楽映画」として語られるか、またはシネ・フィル的な観方をされがちな香港映画を、より「歴史」的に観ることにより、戦後香港に生きる人びとの揺れるアイデンティティのようなものを少しでも自分なりに考えてみたいというものであった。その際、発表の準備をとおして分かったことは、管見の限り、文革当時の香港を思想的な対象として考察するような日本語文献がほとんど見当たらないことであった。大陸中国との往来が制限されていた文革当時、少なくない日本人研究者が香港に滞在し研究をおこなっていたはずである。ただ、そうした中国研究者が、香港を大陸中国の情報を得るための場として活用しなが

ら、そこで暮らす人びとが何を考え、悩んでいたのか、それを思想の問題として語らなかったことは、日本の中国学が香港を眼差す際の陥穽のようなものを感じた。香港に限らず、私たちが中国、台湾について語るとき、そこに生きる人びとの〈いま・ここ〉に思いをめぐらすことから始めることが大切なのではないだろうか。

——今後の研究会予定——

第6回 2016年1月28日(木) 専修大学神田校舎
「フランスにおける文革受容の一側面
——ランシエールとバディウ」
報告・松本潤一郎(言語労働者)

第7回 3月31日(木) 同上校舎
「自由派知識人の文革批判
——徐友漁の思想と行動」
報告・及川淳子(法政大学客員学術研究員)

お詫び 第4号 9ページ右段 下から11行目
と訂正 【誤】類型的んび→【正】類型的に

第5回研究会(2015年11月26日)発表要旨

私にとっての文革——プロローグ

朝 浩之

中国との出会い

私にとっての文革は1971年に大学へ入学し中国研究会(中研)に所属することから始まるのだが、最初にその前史といったものを語っておきたい。

高校3年生(1969年)のときのことだ。同期生1人と他校生3人に図書館が封鎖されて機動隊によって排除・逮捕され、さらに抗議する生徒4人も逮捕されるという事件が起こる。機動隊が大学を含む校内に入ったのは県下で初めてのことであった。翌日からは封鎖には関わらなかったものの逮捕者を出した解放戦線(ML派)が主軸となり中庭において機動隊を導入したとして学校当局を糾弾する集会が連日続くことになり、10日間ほどは授業ができない状況になった。以降も授業をボイコットする者、サボタ

ージュする者が相当数いたと記憶する。私自身は学外での抗議デモに参加するなどにはしたものの、封鎖以前から行われていた県教育長通達反対・自主講座などを含め一連の運動に積極的に参加したわけではない。ただ卒業後、当時の社会状況に押されもし、同期の浪人仲間6人と学習サークルを立ち上げ、ベ平連のデモに参加したのは高校時の体験があったが故の行動だったと思う。

その仲間のうち4人が同じ大学に入り、みなで大学内に勢力をもつ2つの党派^{セクト}の影響下にな社会科系系のサークルを探した。そして探し当てたのが中研だった。高校時代に身近な存在であったML派が毛沢東思想を掲げていたことは知っていたが、毛沢東また中国や文革に特に興味や関心をもっていたわけではない。学生運動に加わりたいの一念で探し当

てたサークルがたまたま中国に関わるサークルだったということだ。

入会した当時の中研は研究活動が盛んで、そのレベルも中国に関する予備知識がないままに入会した私には相当に高いものだった。毛選を読む、北京週報購読、中国文学、中国語初級・中級、社会主義論、資本論などの任意参加によるグループがあり、全体学習会として中国現代史があり、別に全員参加による文化大革命本史、国際共産主義運動と中国の2つの分科会からなる年間研究テーマ「文化大革命」も定められていた。

文化大革命への傾斜

私は国際共産主義運動と中国の分科会に所属したと記憶しているが、中国自体に関する知識が欠落していただけでなく、共産主義、社会主義の理論に触れるのも初めてだったから、学習しなければならぬ課題は膨大なものとなり、授業に出席することは二の次になっていった。文化大革命本史の分科会にも参加はし、文革にどんとんのめり込んでいったのである。

その後、私たち1年生が先鋭化することが一因となって2年生になると会員数が激減して研究体制は維持できなくなるのだが、先輩たちに多くの刺激を受けて切磋琢磨した1年間は、今日まで私が中国と関わり続けてきた間、常に礎となってきた。

そうした当時の私の問題意識は、日本社会を視野に入れて、過渡期（社会）論に傾いていた。過渡期論に関わる具体的な事象として、文革前史といえる繰り返された社会主義教育運動、上海コミューンの挫折、省無聯の実態に関心をもった。

2年生の秋、学内を支配する党派によって1人の学生が虐殺された。以来、半年以上にわたって学内は騒然とした状態が続くことになる。虐殺糾弾運動に積極的に関わった中研は、研究体制どころか日常活動もできなくなっていく。

私は中研とは別に学内における自由な言論・政治空間を求めて、学内を支配する党派に抗うグループに関わっていたから、顔見知りの彼の死を他人事は思えず大きな衝撃を受けた。漠然とではあるが、彼の死は、文革における死者の意味を考えることが私にと

っての文革——課題ではないかと考えさせられた。

大学退学後、継続する中国との関わり

大学をやめたあと職を転々として行き着いた先が中国書を販売し中国関連書を出版する書店だった。その結果、今日まで中国に関わり続けられていることはありがたいことだと思う。お蔭で古代から現代までさまざまな分野における中国に関する知識を得ることができたが、中国、わけでも中国に関わるきっかけとなった文革について“考える”ことは中研の活動をやめた時点で止まったままである。ここ数年、友人や先輩方に助けられて書評などの文章を書く機会が得られ少しずつ思考の回路を回復しつつあるが、土屋昌明教授のお誘いにより本会に加わることができたことは、私にとっての文革を整理するための願ってもない機会を与えていただいと深く感謝する。

生活者の文革とは

文革の正負を問題にすることは文革イデオロギーの正否を問題にすることでもあろう。イデオロギーを全否定はしないが、ドグマに陥ったときのイデオロギーは危ない。またイデオロギーの勝利の形の在り様は革命成就ということにもなろうが、その革命は正義を所与のものとし、正義もまたドグマに陥りやすい。文革の実態が次第に明らかになるにつれ、そうした思いが募っていった。文革はどうしたら成功したのかといった歴史の後知恵的な思考は拒絶しなければならないと考えるが、一方で、文革は失敗に終わったという事実に基づいて、文革を単純否定する立場とは異なる立場から、権力闘争、大衆運動……さまざまな側面から実相をえぐり出すとともに、人民——老百姓、生活者にとって文革とは何だったのかという観点から出発し、文革の失敗からどのような教訓を汲み出すのか、を問いたいと考えている。文革という革命がおびただしい暴力——その極致といえる累々たる死者を生み出していったことへの絶望感が私に重くのしかかる。暴力の連鎖を断ち切ることを“教訓”から獲得できないだろうかと思う。

（あさ・ひろゆき、フリーランス編集者）

胡傑監督『星火』字幕（その 1）

土屋昌明

本文は、胡傑監督のドキュメンタリー映画『星火』の中国語原文字幕と日本語訳字幕（土屋作成）である。

『星火』は、胡傑監督が2013年に制作したインディペンデント・ドキュメンタリーである。本作は、1960年中国甘粛省で発生した、知識人による反体制地下活動に対する政権の弾圧事件を扱っている。作中のインタビューによれば、この事件に関連した人物は200人にのぼり、そのうち40名あまりが懲役刑を受けた。中心人物の張春元は無期懲役の判決のあと死刑に、もう一人の杜映華は懲役5年のあと死刑になった。この事件は、中国国内では禁忌感が強く、ほとんど知られていない。中国国外においても、関係資料の公開や本格的な研究は、まだ非常に少ない状況である。

本作は、2014年8月に北京の栗憲庭電影基金の第11回北京インディペンデント映画祭（中国語「第十一届北京独立影像展」）で中国初上映が計画されていた。しかし、日本の新聞でも報道されたように、この映画祭は当局によって中止におこまれたため、本映画の上映は正式にはおこなわれなかった。その後、同映画祭の審査員は、2014年12月31日に本作に対して「独立精神賞」を出した。このときの審査員は郭力昕・吳文光・楊荔鈞である。管見によれば、中国国内ではまだ公開上映されていない。ただし、一部の愛好者の間では鑑賞されているらしく、インターネット上には感想や意見が出ている。

また、インターネット上の掲出によると、2014年4月3日に香港中文大学で、10月12・16・19日に台北の第九回「台灣國際紀錄片影展」で上映されたようである。台湾ではアジアパースペクティブコンペ優等賞（中国語「亞洲視野競賽優等賞」）・華人ドキュメンタリー賞審査委員特別賞（中国語「華人紀錄片獎評審團特別獎」）をとっている。

ほかに、パリの現代中国研究センター（Centre d'études français sur la Chine contemporaine）主催による討論会「毛沢東時期の民間記憶とその歴史的衝撃」（Popular Memory of the Mao Era and its Impact on History）でも2014年12月15日に上映された（この討論会については本誌第1号と第2号を参照のこと）。そのあと、ベルリンなどでも上映され、好評を博したよしである。日本では、専修大学社会科学研究所特別研究助成土屋グループが、2015年3月12日と13日に上映し、13日に討論会をおこなった。

映像歴史学の作品として本作をみた場合、その基本的な重要性は次の三点であろう。第一に、インタビューに答える登場人物の多くが、この事件の当事者であり、このインタビューそのものが貴重な歴史証言となっていること。第二に、事件の起こった現地を直接撮影しており、この事件の現場環境を理解させる映像ともなっていること。第三に、画面に映し出される地下刊行物「星火」の映像およびその文章は、従来、存在すら知られていなかったものであり、非常に貴重な資料であること。以上、ここに日本語字幕を掲載するゆえんである。

以下の字幕書き起こしでは、段落は原作のシーンの1シークエンスを1段落として、便宜的に番号と画面の説明を加えた（説明部分はゴチックにしている）。この書き起こしは、シーンに対する解釈や注釈を備えた解説を作成する途上であるが、各位のご叱正をいただければ幸いである。

なお、胡傑監督については、土屋「中国の「民間ドキュメンタリー」とは何か—胡傑監督へのインタビュー」『専修大学社会科学研究所月報』598号（2013年4月20日）を、ドキュメンタリー『星火』については、同「胡傑監督『星火』初探」『専修大学社会科学研究所月報』623号（2015年5月20日）を参照願いたい。

『星火』字幕 00

公元1959年底，在中国，由于大跃进运动引发的大饥荒在全国爆发。1960年1月，在甘肃省天水地区的农村，出现了一本分析、批判和记录大跃进与人民公社给农村带来全面灾难的地下刊物，它的名字叫《星火》。

1959年末、大躍進による全国的飢饉がおこった。1960年1月、甘粛省天水の農村に、大躍進と人民公社が招いた徹底的な災難を分析・批判・記録した地下刊行物が現われた。それは《星火》という。

（タイトル）星火

01

兰州 古城坪

甘肃省蘭州。

「古城坪」という標識が映る。大型ダンプが土を満載して苦しそうに走る坂道。下から歩いてきた老人に質問する。

問：文革的时候这里是刑场吗？

「文革の時ここは刑場だったんですか？」

过路人：噢，文革的时候那就是刑场。

「そう 刑場だった」

問：就在下边是吧？

「あの下の方ですか？」

过路人：那边。

「あそこだ」

問：你还看过枪毙人？

「銃殺を見たことがありますか？」

过路人：看过，每次都看。

「あるよ いつも見ていた」

問：每次都看。

「いつも…」

过路人：那时候毙的多，后来渐渐就少了。

「当初は銃殺が多かった 徐々に減ったが」

02

陇西 土甸子村 杜映华 书记

隴西 土甸子村 杜映華 書記

黄土台地に囲まれた畑に作物が風になびいている。その丘の上の石碑の前で、チャルメラなどの伝統楽器で音楽を奏でる楽隊。石碑は杜映華のもの。杜映華の肖像写真が浮き上がる。



03

乡村医生：

村の医者の話。

他爸被枪毙以后，有和他爸搞地下工作的三个同志，买了一口棺材，雇了四个讨饭的，他们把死去的杜英华身上打了个记号，结果晚上去收尸，尸体没有了。据说是兰州医学院拉走作实验去了。上头来的《死亡通知书》，通知了学校的老师寄到了学校，这个老师就把它压下来，我在下边看病时，他就给我看了。他说：烧了就算了，不要给娃们说了，你知道就算了，就这样烧了。

彼の父親が銃殺された後、地下活動をともにした仲間3人が、棺桶を買って、乞食を4人雇い、杜映華の遺体に埋葬番号を打った。夜に遺体を納めようとすると、遺体が無くなっていた。話によると、蘭州医科大学が実験に持ち去ったと。死亡通知書が出て、学校の先生に通知する、それを医大の先生はにぎりつぶした。診察している時に見せてくれた。焼いてしまうから構わないと。子供たちに言うな、おまえがわかっていればいいと。

04

向成鉴（星火成员）：

星火のメンバーである向承鑑が語る。

从武山火车站到县城共十华里，沿着那个铁路走。那个路基下面经常看到死人。我就非常激动，回来以后，我就要写给中央上书，就要反映底下的这些情况，可是我想，人家明明报纸上说形势大好，越来越好，我是个右派，我这样弄出去人家能相信我嘛？不是说我诬蔑诽谤。所以写了又撕，撕掉，看见回来又写，但是这个念头，给中央上书，给毛泽东写上书这个念头始终没有改变。一直到1959年6、

武山駅から村まで十キロを、この鉄道沿いに歩いた。行く先で土手に死人がころがっていた。私は驚いて、党中央に上書しようとした。現場のこうした状況を伝えようと。しかし、新聞では大躍進が好調だと言う。私は右派だった。私の言うことを誰が信じる？政策への中傷だと思われるさ。だから書いては捨てた。死人を見てまた書いた。上書しようという気持ちは、毛沢東に伝えよう

7 月份，发生一件重大事情，我才扭转了我的看法。

という気持ちは変わらなかった。1959年の6月か7月頃、大事件が起こった。それで私は考えを変えた。



05

四川 内江

問：你当时写信的时候瞒着这些同学？

孙自钧（星火成员）：瞒着他们，他们一点都不知道。为什么要瞒着他们，因为我知道这个东西有风险，我要给谁说了，等于让他也承担风险，肯定他要问：你跟谁说了？谁知道啊？

四川、内江、内江師範學院の校門。

「仲間に隠れて手紙を書いたのですね？」

孫自鈞（天水右派の同級生）「全く内緒だった。これは危険だとわかっていたからだ。誰かに話すと、危険を分担させることになる。誰に話したか—詰問されるからだ」

06

向成鑑（星火成员）：他就把底下的情况给中央写信，写的匿名信，写给谁呢？写给《红旗》杂志。

向成鑑「彼は現場の状況を中央に書いた、匿名で。誰に出したと思う？《紅旗》雑誌社だ」

07

孙自钧（星火成员）：我一直是很崇拜毛泽东的，从很小参加革命就崇拜毛泽东。所以我觉得底下的事情可能他不知道，把他蒙起来了。所以我想反映给《红旗》杂志，我看就是甘肃他们搞的。《红旗》是党中央机关刊物，主要是反映请党中央调查到底饿死了多少人？那真是饿殍遍野，一点都不夸张。

孫自鈞（星火のメンバー）「私はずっと毛沢東を崇拝していた。子供の頃から革命に参加していたからだ。だから毛沢東は現場を知らないと思った、ごまかされると。それで《紅旗》に投稿した、私が見た甘肅のことだ。《紅旗》は党中央の雑誌—党中央で餓死者を調査すべきだと書いた。至るところ餓死者だった。何の誇張もない」

08

問：你们为什么感觉到是很紧迫感？

向（星火成员）：主要原因当地死的人没有办法描述，那种心情多一秒钟不知死多少人。

「どうして事態が切迫している？」

向成鑑「死者がどれ程かわからなかったからだ。一刻も急がないととんとん死者が出る」

09

問：当时出现饿死人，领导知道不知道？

乡村医生：怎么不知道啊，我跟你说，唉呀，每一个火车站沿路那死人到处是。那时我上中学，是小娃娃，不怕死人，因为太多啦！见的死人多了，他家那个地方人就丢的满满的，埋都没人埋，那时候人都不臭，人没有脂肪没有肉，干骨头啊。这样的县上干部怎么不知道？知道他也没有那个能力解决问题。和焦裕禄那样的干部咱们这

「餓死者のことを政治家は知らなかった？」

村の医者「知らないわけがない。あの頃、駅の近くの道は、至るところ死人だ。私は中学生だったが、もう死人に慣れっこだった。あそこにもいっぱい捨てられていた。埋める人すらいない。死体が臭くならないんだ。骨と皮で肉がついてないからさ！こんなだぞ。地方幹部だって知らないわけない。知っていても解決能力がない

没有啊，焦裕禄为啥先进？就是饿死人的时候，他敢让人爬火车逃难去。咱们火车站民兵把守，你不能随便走，说你投机倒把，那就把你斗死了，说这你们都不相信。妈妈死在路上，孩子还爬在她身上哭，在吃奶呢，多的很。你不亲眼见你都不能相信。那时候大跃进、人民公社，就是这个浮夸，关键问题就是浮夸。有的地方干部官瘾大，想当官，他就先进，工作搞的扎实，饿死的人就多。有的地方干部保守，想让社员吃上一点，这样干部最后打倒了，可社员没有饿死。

10

问：最后这封信有没有到《红旗》杂志社？

孙自钧（星火成员）：到了的。绝对是到了的。那么，《红旗》杂志社就把这封信转到公安部，它就把它当作反革命事件。

问：抓你的时候情景是怎么回事？

孙自钧：抓我的时候是在天水甘泉抓的。

んだ。焦裕禄みたいな幹部はここにはいない。焦裕禄はなぜ偉い？ 餓死者が出た時に列車を用意して避難させた。この駅は民兵が守っていた。勝手には乗れない。スキを見てうまくやっても、後でリンチに遭う。信じられないだろうよ。母親の死体の上で赤ん坊が泣いていた、おっぱいしゃぶろうと。その目で見なければ信じられないさ！ 大躍進とか人民公社とか、誇張したのが問題なんだ。地方幹部が出世欲にとりつかれ、幹部がやり手だと餓死は余計に多い。幹部が保守的だと、公社員に少しでも食べさせた。こういう人は文革で打倒されたが、公社員は餓死しなかった」

「手紙は《紅旗》に届いたのですか？」

孫自鈞（天水右派の同級生）「絶対に届いたはずだ。そして編集は公安に持って行った。公安は反革命事件とみなした」

「捕まった時はどんな感じでした？」

孫「天水の甘泉で捕まった。」



天水 甘泉鎮

孙自钧：那天他们生产队好像叫我做个什么事，我就去了就拿绳子把我捆了，就把我捆了兰州去了。我当时这样想，你要把我逮去，我就当面跟你讲，我就把农村情况，我见到的农村情况给你讲。那晓得了里面那有你讲话的，打的你晕头转向，你根本别想。你要想活下去的话你只有认罪一条，那怕你再没有（罪）都要认，那真是打呀！要命的事，捆你一下捆的你，给你捆上去屎尿就出来啦。判了十年，就那么一封信，就判了十年。

11

甘肃、兰州、兰州大学

向：我划为极右，开除学籍，劳动教养。我们当时的情况是这样的，由中共甘肃省委把兰大的右派，我们这个等级的右派，整个发配到天水，大概一共四十一、二个人。其中还有教授，还有助教、讲师，几个研究生。天水地委又把我们一破两半，一部分留在水市，一部分分到武山

天水にある甘泉鎮の村の様子。

孫自鈞「生産隊で用事があるというので、行ったら縄で巻かれた。そのまま蘭州へ連行だ。その時こう思った。連れて行くなら直接話してやろう—私が見た農村の状況を話してやろう。行ってみたら話ができる場面など無い。殴られて気絶するだけだ。積明など無理。生きなければ罪を認めるしかない、罪が無くても認めるしかないんだ。ひどくぶん殴られる、命がけだ。縄に巻かれたまま糞まみれになり、手紙1通で懲役10年になった」

甘肃省蘭州、蘭州大学

向成鑑「私は極右と見なされ、大学を除籍、労働教养へ。当時の状況は一甘肅省委員会は蘭州大学の右派を、私のレベルの右派を天水に配置した。40人くらいだった。教授、助教授、講師、院生。天水の地方委員会は私たちを分割し、半分は天水市に、半分は武山県にやった。

县，那么其它大学的右派，象师大，就分到平凉其它的一些专区，我们就分到天水。那么一分为二以后，谭蝉雪、张春元他们在水，还有胡晓愚、胡学中在水，我呢就发配到武山县。那么哪边二十个，这边是二十个。到了武山县委以后，县委又把我们一分为二，一半留到城关公社，我就在城关公社，郑连生一个，张开希一个，苗庆久一个我一个四个，一间房子有多大呢？就么大，这是个土炕，那边有一尺宽的地面，四个人一二三四，那个书就放到头顶上架起来，都是书，码起来高高的。

甘肃 武山

向承鑑：我经历过人民公社化运动，大跃进、大炼钢铁、反右倾，情况知道的太多啦。

12

《星火》一期 《自白》 作者 向承鑑

『星火』1号が画面に映り、そこに載る向承鑑の「告白」を監督が朗読。

「我们信奉的是遵从马列主义基本原则的马列主义真理，我们认为马列主义不是一成不变的教条，对于任何东西，人物、主义等绝对的崇拜，绝非真正的马克思主义者，我们的目的是要建立使工农劳苦大众幸福、人人平等自由的社会，我们目前的口号是，和平、民主社会主义」

13

画面に黄土台地がはるかに映り、村の教師が語る。

唉，那个年代，从五十年代办初级社，高级社，我们这出了个石玉章，这是一个牛皮大王，搞浮夸，这个人他出席了北京召开的社会主义建设积极分子大会，见过毛主席，见过朱总司令，那就吹牛皮嘛，吹的是啥？他从白杨树上结果子，把其它地方的好果子这么大的车拉到北京。给朱德吃，说这是咱白杨树上结的果子，北京大学把石玉章聘请成名誉教授。人干事说话都是违心的，都不照事实说，说实际情况就把他弄倒。

14

《星火》一期 《九个指头与一个指头》 作者 向承鑑

『星火』1号が画面に映り、そこに載る向承鑑の「9本の指と1本の指」を監督が朗読。

「有些省份的农村农民口粮每天只有三两，他们以野菜树叶充饥，许多老人厌世上吊自杀了，而就在这种情况下，统治者还在无休止的向农民收割掠夺。并强制农民拿出24分的干劲，24小时的日夜苦战。如果农民有点不满情绪，那些无法无天的干部可以随时随刻召开所谓辩论会，其实就是打人会。不是捆绑法办就是打得死去活来。」

師範大学などその他の大学の右派は、平涼などに行かせた。私たちは天水だった。分割された後、譚蟬雪と張春元は天水に、胡曉愚と胡學中も天水、私は武山県に行かされた。20人ずつ分かれたんだ。武山県に行ってから、県委員会はさらに分割し、半分は城関公社へ、私は城関公社、私のほか鄭連生と張開希と苗慶久がいた。部屋はどれくらいかと言うと—こんな感じで、土製のオンドルがあり、そちら側が土間、ここに4人、本は頭側の棚に入れた。全部本だった」

甘肅の武山の様子。

向承鑑「私は人民公社運動とか一大躍進・鋼鉄大増産・反右傾運動—すべてを経験した」

「我々の信念は、マルクス主義の基本たる真理を遵守すること、マルクス主義はドグマではない。モノや人や主義に対する絶対的崇拜は、真のマルクス主義者ではない。我々の目的は労働大衆の幸福と平等自由な社会を建設することにある。我々のスローガンは、平和と民主社会主義だ」

あの時代、50年代の生産隊に石玉章という人がいて、ホラ吹き野郎だ。デタラメをやった。この男は北京へ行き、社会主義建設积极分子大会に出席し、毛主席や朱徳らに会い、ホラを吹いた。どんなホラか。ポプラの実や他の場所の大きな果実を、車で北京に運んで朱徳に食わせた。うちの生産隊の果実ですと、北京大学は彼を招いて名誉教授にした。何もかも欺瞞だった。事実に基づかない。本当を言ったらやられてしまう。

「ある省の農民の食糧は日々150グラム、雑草や木の葉で飢えをしのぐ。首をつる老人も多い。こうした状況でありながら、統治者は農民からの収奪に躍りだ。2倍以上の力を出させようと、24時間の苦闘を求める。少しでも不満をこぼすと、幹部は何ら悪びれもせず、適宜に討論会を開く。実は人を殴る会だ。縄で縛られるか死ぬほど殴られるか」

15

乡村教师：「天天有斗争，往死里打，绳子绑打，绑成这么一团再就打，惨无人道。那会儿地主的老婆子放在大会上，打打，把裤带打断了，裤子掉下来了赤腿了，群众——哈哈！那个裤子就不敢往上提一提，就这样，这就是阶级斗争。人格污辱」

村の教師の語り。「毎日のように闘争会があった。死ぬまで殴る。縄で縛って殴る。ぐるぐる巻きにしてから殴る。残酷だった。地主の奥さんが大会で殴られた。ズボンの帯が切れ、ズボンが落ちて下半身丸見えになった。みんなハッハッハッと笑った。ズボンは上げられない。これが階級闘争なんだ。人格の侮蔑だ」

16

《星火》一期 《农民农奴和奴隶》 作者 张春元

『星火』1号が映り、そこに載る張春元「農民と農奴と奴隸」を監督が朗読。

「当前农村的巨大变化之一，就是农民的贫困和破产，农村中出现了新兴的阶层——农村无产者，这个阶层的出现，是由于当代统治者实行的反动透顶的各种农业政策和结果，首先，在农业集体化的口号下，残酷的变相的把农民的生产资料，如土地、耕畜、农具、种子等间接控制，对农民的生产所得，如，粮食、油料、棉花等千方百计的进行掠夺。尤其是人民公社化以后，大大地加速了农民向农村无产者过渡的进程，在这个所谓的通向共产主义桥梁的幕后，使广大农民处于国家奴隶和农奴的地位」

「いま農村の大きな変化の一つは、農民の貧困と破産である。新階層の出現——農村プロレタリア、この階層の出現は、現今の統治者の反動政策とその結果である。農業集団化の下、残酷にも農民の生産材を一土地・家畜・農具などを間接的に制限し、穀物や油や綿花など生産所得に対し、あらゆる手で略奪を加える。特に人民公社以後、農民のプロレタリア化が加速された。“共産主義への橋”の背後で、農民を国家の奴隸・農奴にした」

17

向（星火成员）：59年年底，已经发生了极端严重的饿死人现象，武山县第一书记叫张十存、第二书记叫张克仁，饿死人已经那么严重，在武山一个叫新寺公社还开粮食现场会。

向成鑑「59年末には既に、極めてひどい餓死が発生していた。武山県の第1書記は張十存といい、第2書記は張克仁という。餓死者が相当ひとかったのに、彼らは武山の新寺公社で、食品展示会を開いた」

18

乡村医生：比如说你一亩实打实的说打了二百斤，把你斗死了，就抄豌豆，一圈干部站着把你放在中间，我把你推过去，他把你推过来，就把你推个半死，就这样你说：不要抄了，不要抄了！我们的粮食高的很啊。粮食过黄河（亩产500斤），结果，把粮食都征完了。

村の医者「ムーあたり100キロだと事実を言うと、闘争会にかけられる。“エンドウ豆をゆがく”という。幹部に取り囲まれて立たされ、こづかれ回され、半殺しの目に遭う。それで叫ぶ—わかったからやめてくれ！うちの食糧はすごいんだろ！黄河を渡るほど（1ムーで250キロ）だと。そして食糧は全部巻き上げられる」

19

《粮食问题》张春元

『星火』1号が映り、そこに載る張春元「食糧問題」を監督が朗読。

「粮食为什么会紧张不足呢？要探讨这个问题涉及到整个的农民问题，政治制度生产方式，经济税收对外贸易等。当今的统治者，用自己编造的帐单来歌颂自己的丰功伟绩，试问有这些天文数字来决定农业税收统购任务、出口外销、工业用粮等，必将使广大人民勒紧裤带吃糠咽菜、面黄肌瘦、营养不足。欺骗撒谎吹牛夸张没有一句真话，这是当代政治最突出的特点，也是这种政治发展的必然结果」

「食糧はなぜ不足するのか？これは農民問題に関わるし、政治制度や生産方式—税収や貿易に関わる。いまの統治者は、自らごまかした決算書で、自画自賛する。天文学的数字で税収を決め、経済生活を統括する。それは人々をやせ細らせ、栄養失調に陥らせる。ウソ・デタラメ、真実は一言も無い。これが当今政治の特徴であり、こうした政治の必然的結果でもある」

（次号へつづく）

蔵出し批評

シンポジウム 毛沢東思想と日本の学生運動(抄)

解題・前田年昭

【解題】半世紀近く前に行われた、標記テーマのシンポジウム記録をここに抄録して紹介するのはなぜか。それは、日本における中国研究、アジア研究における文化大革命の影響を再考せんがためである。

近代日本の中国研究は、近世の漢学の流れをうけた支那学に対して、ヨーロッパ史学の影響をうけた東洋史学が圧倒するところから始まり、アジアに対する日本の軍事的発展に対応して発展してきた。侵略体制のなかでのそれなりの成果と発展は、侵略に直接奉仕するものでもなく、逆に侵略に反対するものでもなかった。それは「学問を現実からひきはなし、現実にかかわりのない態度で現実に関係のないことを研究するのが正しい研究である、という考えが、学界を支配していた」ことに起因すると旗田巍は指摘している（『日本における東洋史学の伝統』『歴史学研究』No.270、1962年11月、pp.28-35）。

近代主義の下での“おくれた中国”への優越感とアジア蔑視の観点からは、日本のアジア侵略を敗戦に追い込んだ中国朝鮮アジアの抵抗と解放の力が「見えなかった」。中国革命と新中国の成立はこうした中国研究の反省の契機となった。1962年のフォード・アジア財団の資金援助問題に対する議論と反対闘争はそのひとつの結実であったが、研究資金の出所が問題になっても研究の主体的性格への内省は依然課題として残された。大躍進から文化大革命への進展、迎合と蔑視の両極への揺れ、さらに党派的对立のままに学術団体（一部を除く）は分裂し、衰退した。文化大革命の敗北と終結は、政治の季節への反動から、再び現実から逃避して研究に沈潜する傾向を強めた。史学における「言語論的転回」とカルチュラル・スタディーズの猖獗は、一国史観の反省というプラス面と引き替えに実証なきこつぱ的研究をもたらした。蔑視は反中嫌韓の風潮に合流し、他方、迎合は中国との「社交」に明け暮れる傾向となって習近平政権の提灯持ちとなっている。

ここにある根底的問題は「歴史に対する内在的理解」の欠如である。半世紀前の旗田巍の指摘、「一体、現実をはなれ思想をすてることが学問の純粋性・主体性を守り、学問の内容を高める道であるのか、逆に現実を目を注ぎ思想と学問とを統一することが、より正しい方向であるのか」（前掲論文）という問いかけは、依然として私たちの前に提起されている。

私自身、当時、全共闘運動からの毛沢東思想への関心はどこにあったのかといえば、保守対革新、アメリカ対ソ連という二項対立の世界把握のなかで、後者を選べば即進歩的であるとし自らを問わない傾向に対する疑問と批判が出發であった。米ソ共同支配に反対するという毛沢東の中国によるアピールは、見事に革新／ソ連の虚偽を暴いた。第三の目というモノの見方は「すべては疑いうる」というマルクス主義の初心として以後、私の生きる糧となった。他方、運動の主力が学生であったことからくる観念性には反省と総括が求められよう。中国革命で雷鋒精神の体现者、王傑を「一に苦しみを恐れず二に死を恐れず（一不怕苦二不怕死）」と評したが、日本の活動家はこの一と二との順についてどれほど考えたのだろうか。事実が証明したとおり、より“派手”に“決戦”を呼号した人びとほど後に転向し沈潜してしまっているのである。歴史に学ぶ必要がある。

2011年の東京電力福島第一原子力発電所の事故を機に、これを四半世紀前に見事に幻視した映画『生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言』（森崎東監督、1985年）が再浮上した。この不思議な名前の党の原題は「紅花落水」で、文化大革命時の紅衛兵グループの「党」名だったと監督自身が語っている（『キネマ旬報』1985年5月上旬号）。文化大革命はこれほどまでに、日本社会の深部に浸透した。にもかかわらず、竹内好の「無からの創造」という毛沢東論と丸ごとコピーした丸川哲史、これとは少し違うがここに出てくる高野威の「ゼロの思

想」、さらに少しずれるが矢部史郎の「ゼロベクレル宣言」まで、日本の社会運動、反権力運動における「無」「ゼロ」への仄かな憧れについては、中産階級的潔癖症から来ているある傾向として批判的に総括すべきではないだろうか。

ここに紹介するシンポジウム記録から、研究者と

活動家が日本の変革と中国の変革とを結びつけて議論しあうという時代の雰囲気とともに、本来の学問のあり方を学ぶことができるだろう。そしてまた、文化大革命に対しても被害者意識のみから「魂の拷問」とするのか、自らの内省も込めて「魂にふれる革命」とするのか、も今また問われている。

シンポジウム 毛沢東思想と日本の学生運動(抄)

1969年3月27日

問題提起…佐竹茂 (マスコミ反戦書記長・元都学連委員長)

討論…新島淳良 (中国研究所)、河野福次 (明治大学学生解放戦線)、高野威 (日中友好協会〈正統〉

早稲田大学支部)、岸本五郎 (毛沢東思想共闘戦線)

司会(編集部) 最近の学生闘争の爆発的な進展というものは、日本の全体的な階級闘争の前進局面の一環であるとともに、日本における真の意味での「文化革命」の始まりであると思えることができると思います。これは、個々のセクトや学生が自覚していると否にかかわらず、中国プロレタリア文化大革命と思想的に大きな連関・共通性をもっていると思います。また同時に、特に東大闘争において象徴的に示されたように、日本の学生運動に対して毛沢東思想というものが、現在ますます大きな意味というか重要性をもってきたと思われるわけです。

そこで、今回は、いずれも毛沢東思想の立場から学生運動に積極的にとりくみ、また考えてきておられる方々にお集まり願ひ、「毛沢東思想は日本の学生運動にどうという問題を提起しているか?」「毛沢東思想を日本の学生運動の中にどう具体化・実践化してゆくか?」というような問題について話合っていただくことにしました。まず、従来日共などから「トロッキスト」「極左冒険主義者」などとよばれ「毛沢東思想」とは縁もゆかりもないと考えられていた、また自分たちは「毛沢東思想」を右翼日和見主義の代名詞のように考えていた日本の戦闘的學生運動(の一部)が、毛沢東思想を積極的に評価しそれを指導思想としてとり入れてゆく上で一貫して努力してこられた元都学連委員長の佐竹さんに、総括的な報告をしていただき、そのあと自由討論に入ってゆきたいと思います。

問題提起 毛沢東思想と日本の学生運動(佐竹茂)
[略]、討論 [中略]

毛沢東思想を日本にもたらしたプロ文革

——学生役割の普遍性——

新島 最初に佐竹さんが、日本の学生運動が發展して、毛沢東思想を受け入れ、更にそれを活学活用し發展させる域まで来ているというふうに把えるべきだと言われた事は、全くその通りだと思うのです。毛沢東の言葉に「ロシア十月社会主義革命の一発の砲声が中国にマルクス・レーニン主義をもたらしした」というのがありますが、それををもじって言えば、「プロレタリア文化大革命は日本に毛沢東思想をもたらしした」のです。中国の革命の勝利、毛沢東思想がその中で非常に大きな役割を果たして来たという事は、従来から、日本の一部の学生、革命的進歩的人民によって知られていたわけです。ところが、中華人民共和国の成立の時点では、日本で毛沢東思想を大衆的規模で受け入れるということは起らなかった。逆にまた、ロシア十月革命の影響が、日本に、マルクス・レーニン主義を大衆的規模でもたらししたという事もなかった、と僕は思うのです。ところが、中国のプロレタリア文化大革命がおこってはじめて日本に毛沢東思想がもたらされた。その場合の毛沢東思想は何かというと、佐竹君がさきに言われた様に、それが帝国主義が全面的に崩壊して、社会主義が全面的に勝利する、そういう現代のマルクス・レーニン主義の最高峰としての毛沢東思想という事になる

わけですが、今、また同時に河野君の言われた、現状への根底的な問いかけ、マルクス主義の初心に目を向けさせるという役割をプロレタリア文化大革命が果たした、というふうに言い換えることができると思うのです。では、何故、十月革命なり49年の中国革命において起らなかったことが、今の時点で起こるのかというふうに考えてみますと、文化大革命と現在の日本の革命運動との非常に大きな類似点が注目される。中国の紅衛兵、これは全部学生、大部分は中等学校の学生ですが、大学生は勿論全部入っていて、約一千万という空前の規模の学生運動が中国で起こって、文化大革命の“先知先覚”になっている。日本の場合でもこれから非常に広範な労働者・農民・全市民を巻きこむ革命運動に発展するに違いないと思いますが、さしあたって、その尖兵として先進的な学生が道を切りひらいている。つまり、そこにはひとつの共通点がある。その共通している学生という要素が十月革命や49年の中国革命になかった点です。〔中略〕

プロ文革・毛思想を受入れるのに貢献した日本学生運動

もうひとつ、中国の文化大革命が、他ならぬ現在、非常によく日本に受け入れられる条件をつくったということ、これが日本の学生運動の諸君のおかげだと思うのです。というのは、私達のまわりにいる知識人は皆、数年前、文化大革命が起こった時、これが何なのか分らなかったが、今になって分かると言っています。つまり、日本の羽田の10・8以降の闘争がなかったら、文化大革命は、日本に正しく伝わらなかったと思うのです。日本の学生の運動を見てはじめて、中国の紅衛兵の運動が同じことだったのだということが分ったということです。その中で、ちょっとおもしろい言葉を紹介しますと、「文化大革命は分るが、日本の学生の動きにはついて行けない、日本の和製文革にはついて行けない」という奴はニセモノで「日本の学生運動は分るが、文化大革命はよく分らない」という人は、これから本物になる。こういうような事がある自然科学者が言っていました。そこで、日本の学生運動、全共闘がきり開いた道をどう評価するか、という事が、中国の

文革を、口先きだけでなく本当に理解しているかどうかのリトマス試験紙になると思うのです。それでは、日本の学生諸君の先進的な部分が、何故、文化大革命で、毛沢東思想を理解したかと云えば、僕は、紅衛兵運動の重要な特徴を二つだけ指摘しておきたい。ひとつは中国の文化大革命がある一定の段階で、明確にコンミュンというものを目指したこと。つまり、一番最初に北京大学で、七人の共産党員が、革命的な壁新聞を貼り出した時に、毛沢東が、1960年代の中国におけるパリ・コンミュンの宣言書だと言って、パリ・コンミュンの名前を出した。それ以来、パリ・コンミュンという名前は、中国共産党の8期11中全会の16カ条の中にも出てきますし、上海の一月革命においても、毛主席が二度目のパリ・コンミュンの宣言書だと評価しているのです〔中略〕中国において起っている事は、紛れもなくコンミュン、すなわち、 Kommunismus を目指すものであるという事を、はっきりと、世界に知らせることになった。そこ点が第一点だと思うのです。それから、二番目に、中国の文化大革命の時に初期にあらわれた運動の形として、従来の常識から見れば、色々な矛盾というのは、非暴力的に、或は合理的に解決できるのだという考えを打ち破って、中国の全ての政治制度、文化・教育・衛生等全ての分野において、最も根底的な批判、五月革命の言葉を使えば、全面的異議申し立てという様なことが行われた。つまり、部分的な改良ではなくて、全面的な批判という事が行われた。そして、ややもすれば、先進国の共産主義運動が部分的改良闘争に墮していたという事に対して、初心に帰る、マルクス主義の根本的なものをあらためて思い起こさせた、という事。日本の知識人は、昔も今も中国を後進国として軽蔑して来たわけですが、文革が後進ではなくて、現代世界を根底的に否定するマルクス主義の原理の上に立つものであると認識させたという事情があるのではないかと思います。

五・四文化革命——プロレタリア文化大革命——日本文化革命

高野 佐竹さんはむつかしいテーマをととてもみごと

にまとめて下さいました。ぼくは多少ともナナメにかまえないと何もいうことはないというところでは

日本があって中国がある。二つの歴史をある角度からナナメに切りとると、ここでは「文化の革命」というところで切るわけですが、〈五・四文化革命〉、プロレタリア文化大革命、現在開始されつつある日本文化革命、という三角形があらわれて来ます。われわれはこの一つの点である日本文化革命、つまり「日本の学生運動」というところに視点を置くことを余儀なくされている。「毛沢東思想」とはほんとにあるのかというと、残りの二つの点の間にシャガーふうふう横たわっているわけです。毛沢東が五・四を新民主主義革命の起点としたのには、彼の世界革命論からする科学的な根拠があるわけですが、ナナメにかまえていかにあえていうと、彼の青春の最後の輝きのような、そういうイメージ、心底からの熱狂の記憶といった面もまたあるのではないかとぼくは考える。毛沢東の青春のモチーフとは農民的無政府主義と都市（北京）の、造反と理の、出会いということです。都市における造反、それが文化革命である。毛沢東は五・四を「共産党なき共産主義革命」「中国史上、最大かつ最も完璧な文化革命」と表現するわけですが、五・四によってマルクス主義者となった毛沢東にとって中国革命とはこの都市の文化革命、彼の青春への源泉回帰の過程だった。その行きついたところがプロレタリア文化大革命というわけです。毛沢東思想というのは、五・四の時の〈民衆の大連合〉から、プロ文革で大衆の蜂起と大連合をよびかけた多くの指示までということになります。その三角形のいわばむこう側の稜線の丁度中点に毛沢東思想の最も包括的な自己規定たる「マルクス主義とはひとことでいうと“造反有理”だ」というあのことがあります。

話が雑になるのをお許し願いたいのですが、日本の学生運動という視点に立ってこの三角形を考えていく手順として、まずプロ文革を経た地点で五・四を振り返ってみる、それから文革に至る毛思想を、その原点たる五・四、とりわけ五・四文革の思想上昇極たる魯迅のマナザンを通して翻訳してみる。最後に造反有理とはなにかという形で日本文化革命

の根拠を考える。こういうことで少し駆け足になりますが話ししたいと思います。

五・四——〈造反的人間〉の出現

プロ文革の眼で見た五・四とはひとくちに言えば〈造反的人間〉の出現ということです。テロリスト・先覚者ということできなく、ひとつの社会的階層としての広範な学生が、デューイが報告しているような、逮捕覚悟で歯ブラシをもってデモをやるという、「ゼロの思想」というか、自分がすでに持っている生活なり全てを投げ打っても人類の全体性を獲得するのだといった、逆転する、戈を返す思想というのが、ここではじめて歴史的に登場して来たのではないか。ロシア革命との対応関係というのは、陳独秀や李大釗を通じて「伝達」されたというよりも、こうしたゼロの思想、プロレタリアートの思想というのが大衆のレベルで、といっても知識層が中心だが、ある対応を形成した、ということだと思えます。この「ゼロの思想」は単なる不満や抗議ではない。魯迅がこの年書いた〈狂人日記〉がつきつめているように、俺もまたヒトの肉を食っている、半植民地半封建の社会で生きている俺たちは腐食している、そういう自分を脱け出したい、そのギリギリのところでの自身に対する裏切りということを造反的人間ということばは意味していたし、それがゼロの思想、マルクス主義の根底たる、革命の主体であると同時に対象であるプロレタリアートの思想ということだと思えます。東大全共闘の、安田講堂・列品館での、いわゆる「自己否定」がつきつめられていった「トリデの狂人」の敗北必至の論理というのはこれと同じ、ゼロの思想の、造反的人間の、日本における誕生を意味していたのではないかと

「造反有理」と大衆路線

二番目の問題にまで入り込んでしまいましたが、日本の革命的學生が毛思想をとりこんでいく主要な水路として、魯迅を経由するというルートを考えることができる。五・四文革の時代の希望と絶望をあきれるばかりの精緻さで描いた魯迅の〈狂〉の観念、孤絶の極北での造反、しかも重苦しく持続し日常

性に埋れている生活者たち、こういうところを一切の基礎にして毛沢東思想というものは成り立っている。統一戦線ということも、党派と党派という平面的発想ではなくして、魯迅的な個人原理にまで状況を解体してもう一度組みなおすという操作がなされたのではないか。或いは〈持久戦論〉の発想というのは魯迅経由のニーチェ主義である、とぼくはむかしからそう主張しているわけです。毛沢東思想とはすべての大衆が国家の高みに達することを夢見つつ国家の死を語る能動的ニヒリズムであり、ロシア・マルクス主義とアナキズムのびりびりする相互反省のうちに成り立っている新しいマルクス主義である、といえます。

とまあここで毛沢東の、新しいマルクス主義としての毛沢東思想に対する自己規定といえましょうか、そういうものとして「マルクス主義をひとことという」と“造反有理”だ”ということの、日本の学生運動にとって意味のある理解の仕方というものを提起することができます。ぼくらの〈紅河〉(日中友好協会〈正統〉早大支部機関誌)は「叛逆のうちにロゴスがある」と訳したわけですが、「叛逆は固有のロゴスを持つ」ということもできる。それはどういうことか。

毛沢東思想を近代マルクス主義と次元の違うものにしてしている根本的特質は、大衆というもののとらえ方です。人民大衆こそすべてだという大衆路線の思想です。大衆ひとりひとりが実践する、その実践の意味作用によるコトバとして、自身の可能性(歴史的必然性)を意味するもの、すなわち国家権力なり経済機構なり党なりが形成される。原点は大衆にあるのです。そして階級社会では、「生きた労働力」プロレタリアートの意味作用が「死んだ労働力」資本というコトバをつくりだすというようにこの関係が敵対的な「逆立」としてあるのです。吉本隆明はこれを共同幻想としてヘーゲル的に展開するが、毛沢東はこれをコミュニケーションとしてとらえる。生活する大衆だけが全体的なものであって、その全体性を階級的「私」性をもっておさえこむ国家とか党というものは絶えず崩壊にむかわねばならない。造反とは、この所与の疎外されたコトバ、資本や国

家やイデオロギーや党、のつくっている環境にたいして、大衆が個々人の全体性を回復しようとする行為、大衆の自己表現を意味しています。もちろんここでは黨員も、毛沢東でさえ大衆です。コトバを、意識を拒否して、自分と世界を想像力において対置することで世界を奪いかえしてゆく。想像力が権力をとるのです。ところがそうして表出される造反というのは、絶えず自己に回帰して酸化する、反動的なものになっていくわけです。そこで、いわば反歴史的行為としての造反はその歴史性において反省されねばならない、それが固有のロゴスをもつ、もたねばならないということです。理(ロゴス)の側から反省された造反とは、コミュニケーションの問題である。プロ文革でいえば既製のコミュニケーションを破壊し、大交流とか三結合とか革命委員会とか毛沢東思想宣伝隊とかそういう大衆のエネルギーの発展をより高い次元で反映しうるコミュニケーションを創造していくことです。こうして造反の一次的な自己否定が、社会の総体における革命的否定へと展開されていく。五・四と文革に共通する、つまり毛沢東思想を貫く原理とは、造反から理へ、叛逆からロゴスへ、思想的自己確認から現実的変革へ、革命的知識人から生活大衆へ、という「否定の否定」であった。この相互否定をあらわしたのが「大衆の中から大衆の中へ」ということであり、「創造力が権力をとる」というアナキズムのスローガンと「革命の根本問題はコミュニケーションの問題である」というレーニン的な思想を同時に表現しようとして「造反有理」のコトバが成立したのだと考えるわけです。

日本文化革命の課題

国家独占資本主義、ないし「管理された消費のテクノクラート社会」といわれる現代の日本において、コミュニケーションの発展により、例えばテレビを通じて本来個人に属するイメージまでも国家が管理する、また消費をイデオロギー化して自己規制、自己搾取の外見をもった支配、搾取を新しい形で貫徹してゆく、いわゆる階級解体が進行しています。この社会の主要な指標は、ぼくらが党とか労組とかの組織を媒介にして国家と対決しえなくなっているこ

とです。生活の中のコミュニケーション、すなわち文化が敵権力に奪われつくしている。こうして、いまぼくらが意識的に打ち出していくべきスローガンとして「日本文化革命」ということがでてくるわけです。

都市と造反の出会いが文化革命であるといった。中国革命は五・四以降1960年代に至るまで都市を離れた造反によっておしすすめられて来ました。日本では都市はあるけれども造反というものは10・8以降、とくに日大・東大の中ではじめて出現し定着した。〈帝大解体・造反有理〉という東大正門のスローガンは日本文化革命の宣言書であったのです。だがそれらも、いってみれば都市の中の農村ともいうべき大学の中の造反でしかない。「理」とはそういう学生の闘いの位置を相対化して展開過程を論理化していくことです。大衆の生活の中でまだ造反の対応的喚起がなされない。五・四で学生が通りへ出て労働大衆に訴え、大衆をたちあがらせていく、労働大衆の側でそういう一定の刺激をもとに自分で自分を解放する、自己否定の運動を形成していく、その発展過程というものを、またそれはフランス五月革命が革命ならぬ革命であったのに対しプロ文革が革命になりえたゆえんでもあったわけですが、これが10・8、日大・東大と巨大な造反をかちえた地点での、現在あらたな次元であらわれた主体的危機を克服していくために、ぜひとも日本の学生運動が毛沢東思想から学んで解決すべき緊要の、しかも少なからぬ忍耐を必要とする課題であると考えます。

〔中略〕

大衆路線・造反有理をめぐる

新島 高野君の意見、大変面白いと思ったのですが、それに関連して高野君に聞きたいのですけれど、大衆路線というものを、大衆の全体性という思想だというふうに要約されたわけだけでも、僕はちょっと理解が違います。大衆路線というのは、指導方法を正しくするための路線であると思うのです。言い換えると、一方で前衛としての共産党、一方で大衆というものがないと、毛沢東の言っている大衆路線の論理にならないと思うのです。ところが、さき

ほどのお話ですと、大衆の全体性という中に党がどうも入って来ない、言い換えると痘ぬきの論理なので、これはちょっと毛沢東のそれとは違うのではないかと、聞いていて感じたのですけど。その点どうですか？

高野 大衆路線とは大衆の意味作用つまり三大実践と、そこにおける社会関係的媒介となる「意味するもの」との相互否定の論理だと申し上げた訳です。実践の媒介性、否定性としてあらわれる〈主体〉は党とは限りませんから、それは「大衆—少数者集団—大衆」でもいいし、「大衆—プロレタリア司令部—大衆」でもいいし、「大衆—個人—大衆」でもまたいいのです。だが最も普遍的な純粹論理としては、それは個人原理である。主体とは大衆＝世界＝他者と自分を等置して、それに働きかけようとする。だから毛沢東は〈工作方法六十条〉の中で大衆を他者（別人）といいかえることができた。この意味の否定的主体が一般的にいて党以外でありえなかった〈指導方法の若干の問題について〉の時期と、党が平和と民主主義の中国版の中ですでに変質しはじめ、個人の主体性が問われていた〈工作方法六十条〉の時期の間に基本的な断絶を見なければならないし、いうまでもなくぼくらにはいま後者こそが問題である、つまり「一人になっても革命をやる」「八つ裂きにされても皇帝を馬から引きずりおろす」ことと、「大衆の中へ」ということとの二つの任務をひとつのこととしてとらえ、実践していかなければならない情況にむかっていると思うのです。

新島 大衆路線が認識論だという点はそのとおりで、私も前に書きましたが、それは、認識論の中に党という核が必要だということだと思うのです。その点で、あの論文〈工作方法六十条〉というのは、基本的に僕は、40年代の毛沢東思想と、質的には変わったものではないと思っているのです。それを、造反論と結びつけていいかどうか。関係は非常に深いのですけれども、僕は「造反有理」というのは、プロレタリア倫理、プロレタリア道徳の問題として考えるのです。だから、むしろ、光岡君がよく言っている、日本の今の学生運動の、ゲバ棒とか石を持っての運動と人民の軍隊の共通点と言われた「犠牲的精神と

「勇気」の問題との関連の方を、僕は「造反有理」から連想するのです。実際に文革の中で使われた「造反有理」という句は、どういう時に使われたかと言ったら、やはり僕はそういう犠牲的精神と勇気との関連で言われたと思う。論を少し広げれば、ブルジョア倫理というのがある様な意味で、プロレタリア倫理というのがあるだろうか、という様なことです。(これは井上清らがいう「プロレタリア科学」代々木のいう「民主的科学」の問題にも通ずるが)。レーニンがプロレタリア倫理というものは、プロレタリアートの解放運動のために必要なことなら何でもするという事、というふうに定義する。つまり、共産主義道徳というのは、革命の必要に応じて何でもやるという事だと、こういうわけです。例えば、現在何が必要かと問うて一番必要なのは、個々人の中に、そういう勇気、犠牲的精神というのを打ち建てる事だと答える。ついでに言いますが、解放区とか根拠地とかいうものの、一番ミクロなものは、やはり、個人の中にあると思うのです。毛沢東の軍事理論というのは、一挙に解放区へ行くものではないのであって、必ず一番最初はゲリラ地区時代があるわけです。ゲリラ地区時代における武装闘争の一定の発展段階で解放区というものができる。しかしその最初の、ゲリラ区はどうしてできるかと言えば、やはり個人の中にそういうプロレタリア倫理、言い換えれば、解放闘争に必要なことならいかなる事もするという精神をうちたてることだと思うのです。ところが、いかなる事もするというその「する」という事には、ブルジョア倫理というものとそれからの類推から考えられる様な体系的な、あらゆる人間生活の全分野を包含するような倫理体系を前提とするものではないと僕は思うのです。つまり、日常生活において、たとえば我々が人と話をするときには、おだやかに口をきかねばならないとか、借りた物は返すとか、他人のものを盗まないとか要するに、体系としては、また個々の徳目としてはブルジョア倫理

の中で生きているわけです。ところが、革命の必要のためには、普段は、言葉使いはおだやかかと思っ
ているけれど、革命時には激しい言葉を使って鉄拳を振うということもあるという事で、だから、暴力一般は存在しない、存在するのは必要な〈部分〉(時と所と場合)の暴力=造反だけだ、つまり、そういうのが、ブルジョア倫理の立場からすれば、造反と見られるということです。それは何も、プロレタリア倫理のためにやるのではなくて、革命のためにやる。「造反有理」と言った場合に、ブルジョア文化・ブルジョア倫理あるいは帝国主義支配秩序を、革命のために破る、それが造反だというわけです。つまり、造反というのは、はじめから非常に部分的なもの、そういう否定だ、ということです。今の日本にしても、文革の初期の中国にしても、必要だったのは、そういう個人の中における造反の精神の確立ではなかったかと思うのです。だから、それを全共闘の言葉を借りれば、たとえば、日大の文理学部のパリケードが取り払われた時、彼らは、「我々の心の中のパリケードは取りはずされることはない。」とか、あるいは、砂川闘争の時に、「心に杭は打たれない。」とか、あれはやはり武装闘争といい軍事路線といった場合の人民戦争路線の一番の基礎なのではないでしょうか。文革の初期に紅衛兵たちは「たとえ身は八つ裂きにされようともあえて皇帝を馬からひきずり降ろす」という気概があったし、それがなければ造反できなかった。学生たちは実権派からリンチを受けたし、造反した労働者は、上海における様に、死刑にまでなった。文字通り、死を賭して造反をした。革命のためには、党規約であろうと、何であろうと破るという様な精神が一番基礎にあった。それが現在の日本の、一番先進的な学生諸君の中にあるものと同じものだと思うのです。だから、大衆路線と造反有理とは、大きく結びつくとは思いますが、僕の今の文革のイメージからは、この二つは別の次元の様な気がしているのです。〔後略〕

出典：『中国研究月報』254号、1969年4月、pp.9-35から抜粋

※ 再録にあたって、明らかな誤植は正し、「。」を「」に換え、「全共斗/全共闘」「斗い/闘い」の「斗」は「闘」に揃えた。

註1 高野威は、翌1970年2月『われらの内なる差別 日本文化大革命の戦略問題』三一書房、同年6月『魂にふれる革命』ライン出版で、デビューした「津村喬」の本名である。

註2 文中に出てくる「毛沢東・工作方法六〇条(草案)」は新島淳良の翻訳・解説によって、『構造』1970年6月号、pp.180-225に掲載、紹介された。